

エミール・ギメとフェリックス・レガメー、 日本を散策して日仏文化交流の礎を築く

奥 正敬

はじめに

今年が日本がフランスと国交を開いてから150年になり、記念すべき節目の年にあたります。1858(安政5)年にナポレオン3世の親書を携えたジャン・バティスト・ルイ・グロ(Jean Baptiste Louis Gros, 1793-1870)男爵が率いる使節団が来日して、徳川幕府との間で修好通商条約に調印し、フランスとの国交が樹立されました。明治時代に入ると両国の交流はさらに深まり、政府や地方組織が「お雇い外国人」として招き入れる専門的知識人の他に、商業や観光など様々な目的の旅行者が日本の土を踏むようになりました。このような人々の中に、宗教調査を目的に来日し、旅行記を著して異文化の国日本を爽やかに紹介した二人の人物がいました。一人は実業家で、名をエミール・ギメ(Emile Guimet, 1836-1918)といい、もう一人は画家でフェリックス・レガメー(Félix Régamey, 1844-1907)という人物でした。

国際性と異文化理解度を高めた二人の生い立ち

二人は1876(明治9)年に万国博覧会が開かれていたアメリカのフィラデルフィアで合流して日本に向かい、同年の8月26日に横浜へ着きました。この旅行の目的である宗教調査はギメがフランス文部大臣から託されたものであり、レガメーはギメが指名したイラストレーターでした。ギメは、父から事業を受け継いだリヨンの大実業家ですが、陶芸や絵画、さらには作曲など文化面にも関心が高く、自社で働く人々のために共済組合や学校なども作り、福利厚生にも力を注いでいます。また、エジプトをはじめ、世界各地を頻繁に訪れて文化財を持ち帰り、特に東洋美術には強い関心を持っていました。一方のレガメーはパリで画家の子として生まれ、美術学校を卒業してデッサン学校や建築学校の教員を務めていました。彼の活動は国際的で、イギリスやアメリカに滞在して有名な雑誌へ挿絵を提供していました。この様なことから、二人は異文化に対して大変に優れた理解力を身につけていました。

江戸時代の名残を留めた日本

彼らが第一歩を記した横浜は江戸時代末期から外国に開かれ、すでに西洋風の建物が並ぶ区画が形成されていました。二人は洋式のホテルに宿泊し、ここを起点として4年前に新橋・横浜間に開通していた汽車で東京を見学、横浜から人力車で鎌倉へも赴いています。また、人力車を使って日光へ一週間の旅をしています。さらに、横浜に戻って未だ鉄道が開通してない東海道を馬と人力車で西へ進み、伊勢から京都に入りました。ここ京都では榎村正直知事が、二人のために仏教や神道関係者を集めて数回にわたり開催した宗教会議に出席しました。そして、11月3日に神戸から3ヵ月滞在した日本を離れ、中国を経て帰国しました。

この頃の日本社会は、明治政府が樹立されてまだ8年、函館の五稜郭を最後とする戊辰戦争が終結して7年を経た時期でした。しかし、全国各地で政府に対する一揆が頻発しており、二人が滞在した翌年の1877(明治10)年には、西郷隆盛ら九州の士族の反乱である西南戦争が起きるなど、不安定な要因を多く抱えていた時代でした。また、人々の暮らしぶりも横浜の西洋館街の風情とは異なり、江戸時代の名残を色濃く留めていた頃で、ギメはこの国の文化を丹念に書き留め、レガメーも人々の生活や風俗を見事に描写していたのです。

二冊の『日本散策』に纏める

二人が帰国後この記録をもとに執筆し、挿画を配してパリのシャルパンティエ社から刊行したのが *Promenades japonaises* (『日本散策』、以下書名は日本語で表記)で、出版年を異にした二冊の巻から成っています。最初の巻は『日本散策』を主題として1878(明治11)年に刊行されました。本書には横浜到着時から、この町や近辺の紹介、また横浜を起点にして鎌倉までの人力車の旅の印象を綴っています。さらに第2巻は、2年後の1880(明治13)年に同じく『日本散策』の主題のもとに、「東京・日光」を副題として刊行されています。これらの二冊の本には、当時のヨーロッパの人々がアフリカや東洋などを紹介した書物に多くみられる、西洋文明を優位とする考え方などは全く見られず、ギメは日本で初めて接した風俗や文化を好意的な筆致で紹介しています。